

## 「社会に開かれたアート」プロジェクト・マニフェスト

— 感性と社会性が出会う場所 —

2024年6月  
Makaira Art&Design

「ホリスティックにアップデートする社会」をミッションとするマカイラ株式会社の社内カンパニーであるMakaira Art & Design (MAD)は、社会に関わるクリエイター及びキュレーター集団として、アート(造形美術だけでなく文芸、音楽、演劇なども含む広い意味での芸術)と社会のさまざまな接点を模索し、社会のうねりを作っていきたいと思っています。

MADが「アート」を重視する理由は、アートが今の社会が直面する大きな課題、すなわち民主主義と資本主義の危機をもたらす社会の大変革への答えの糸口につながると考えるからです。この根底にあるのは、私たちが未だに、産業革命以降の直線的に拡大していく近代的世界観を乗り越えられていない、という問題意識です。これは戦後のポストモダニズムの思想的洗礼を受けた後も続いており、むしろ現場の状況は悪くなっていると私たちは考えます。

飽くなき人間活動の拡大は、地球の限界を超えて環境を破壊しつつあります。グローバリゼーションは世界全体の富を増やしましたが、逆に貧富の差も拡大させ、国際関係の悪化や各国内の民主主義の不安定化につながっています。テクノロジーの発展は、自由で便利な生活をもたらした一方で、民主主義社会の維持に不可欠な、違いを認め合う開かれた対話の機会や共感能力を人々から奪いつつあります。今後はさらに、人工知能や生命科学の発展などにより、「人間の尊厳」の意味自体が根本的に問われる時代になっていくことでしょう。

私たちが直面している状況はおそらく、単に、今の社会を生産技術やビジネスモデルの革新によってずっと延命し続けられる、といった軽いものではありません。生活・文化・思想・統治機構などを含む社会の在り方すべてが、数十年から100年以上の期間にわたって、大きく変わらざるを得ない、中世から近代への転換の時と同じくらい大きな時代のうねりの節目にいる、と考えるべきです。

過去のこのような転換期には、社会はしばしば不安定化し、経済的な混乱だけではなく、大きな戦争や動乱などが起きることがありました。不安になった人々は分かりやすい答えを求め、さまざまな扇動者や独裁者が現れたりします。現在のメディア空間と国内外の政治状況は、早くもその危険な兆候を感じさせ始めています。

そのような不安定化のおそれに対して、社会としてしっかりした抵抗力を付け、より明るい未来に向けた展望の光をともすことができるのが、アートの力だと私たちは考えています。

理由は大きく、二つあります。

まず一つは、アートの持つ、ゼロベースの直観的な課題設定能力と表現対話能力です。今のような複雑な問題状況を前にしたとき、私たちに必要なのは、すでにアジェンダ化された社会課題のソリューションをデザインする活動を超えて、そもそも何が問題なのかを批判的に問い続け、社会のあり方について対話を生み出す力です。アートには、「そもそも今の社会の何がおかしいと感じるのか」「何が私たちを不安にさせるのか」を、既存の思考のフレームワークにとらわれず、直観を働かせながらゼロベースで感じ、表現し、考えるさせる力があります。

このような表現活動は、人々が当たり前としている意識を揺さぶるので、しばしば「分かりにくい」ものとなります。しかし、人々が安易な分かりやすさを求める時代には、逆に分かりにくい多義性や、曖昧さに留まる訓練が必要です。

私たちは、人々が個人の分かりやすい正義を振りかざす、感情が劣化した社会を作りたくない。他人への共感能力や、自然物や宇宙にまだ拡張された想像力、複雑なもの前で立ち止まって耳を澄ませる力、それを知覚して深めること、を大切にしたい。「見えないものを見ること、聞こえないものを聴くこと、言葉にならないものを表現し、受け止めること」。そのためのアートです。開かれた、安定した民主主義社会のベースには、そのような能力があるはず、と私達は考えます。

私たちが、「アート」にこだわるもう一つの理由は、アートのこのような感情を喚起する力です。新しい社会の地平を拓くためには、哲学・社会批評・ジャーナリズムなどが強みとする知的論理的活動も、もちろん重要です。しかし、私たち人間の生活は、純粹に知的で論理的な構成要素だけで出来ている訳ではありません。生きていく意味や意欲の大半は、むしろ感情的なことがらにベースがあると言っても過言ではないのです。

アートには、言葉になり切らないものを捉え、伝える能力があります。それは、「社会を前に進めるエネルギーとしての能力」と言い換えることもできます。知的論理的活動が、「どちらに進むか」の方向性決定に主に貢献するとしたら、アートを含む情動活動は、「そもそも進みたいと思うこと」の原動力に貢献します。生への衝動を活性化させ、人を突き動かす力を持つこと。その根底にあるのは「生きる意味」を探る人間への想いであり、「生への衝動」とでもいうものを内在的に持つ人間の心の在り方です。

私たちが、時代の未曾有の変化を乗り切り、その先に人類として、いち個人として、何かの希望の光をともし続けようとするのであれば、そこにはそのような情動性の要素が必ずあるはずです。それは、「美」や「ポエジー」といった言葉で捉えられてきたものかもしれません。

もちろん、このようなアートの捉え方については、古い、狭い、といった批判があるかもしれませんが。しかし私たちは、作者や制作参加者の情動や生きざまが作品を通じて現れる時にこそ、その作品が目を奪い、心に届くのだと思っています。現代アートの中には情動性を排したコンセプチュ

アルなものが多数あることも、理解しています。そのようなアートの、社会に対する鋭い批判力を否定する訳でもありません。

ただ、私たちは、どんなに知的で概念的でハイコンテキストな作品であっても、そこにたとえば「美」と言われるような知覚的な刺激のとっかかりがあったときにこそ、人は作品の概念的な意味を深く考えるきっかけを与えられると思っています。そして、その深い思考の潜航からふたたび知覚的な鑑賞の場に浮上し作品に出会い直したときに、作品はさらに新しい輝きを与えられ、そしてその輝きがさらにふたたび概念的な知的思考や、さらには実社会での何らかの実践活動にいざなう、という往還活動が行われると考えています。

アートについて、このように考えるとき、私たちがこの「アートプロジェクト」で取り上げ、支援していきたいタイプのアートの姿が、よりはっきりと浮かび上がります。

それは「感性」と「社会性」の間で揺れ動くアートです。社会的に対する課題意識から全く切り離されている訳ではなく、一方で単なる知的概念的活動を超えて感性に訴えかけてくるもの。社会の在り方への直観的な把握と、人を動かす情動性の両方の要素を兼ね備えているアート。もちろん、「社会性」が強く打ち出されているものもあれば、「感性」の要素が強いものもあるでしょう。そのグラデーションの中でさまざまなアートの在り方を模索し、クリエイターやキュレーターとして、制作参加者や鑑賞者として、アートに関わり、社会にうねりを作っていくことがのが私たちの目的です。

私たちが単に「社会派アート」「社会課題解決型アート」といった分かりやすい表現を好まないことには、理由があります。

一つはまず、「社会課題解決に奉仕するアート」という形で単純化されてしまったものが、深みのある面白いアートを生み出したことはあまりない、という歴史的事実です。典型的には、ファシズム体制下で統制された芸術や、政治運動の一部になってしまったプロレタリアート芸術、「ウォッシュ」とも批判されることがある企業による近年の商業的なSDGsアート。「芸術のための芸術」という純血主義にくみする訳ではありませんが、私たちは、芸術が社会課題解決に奉仕する責任を負うものだと考えていません。社会の役に立つ特定の行動に人々をナッジすることは、アートよりもむしろ公共広告やデザインの役割です。

芸術はやはり、人が生きる意味を感じ、味わい、探し求める「実存的な活動」の一部を担う意義が大きいと考えています。ただしそのような中でも、純粹にパーソナルな出来事に特化したものや、形式革新にのみ関心があるもののように、完全に脱社会化しているアートよりは、社会的なことから関心を開いたアートの方が、「ホリスティックにアップデートする社会」をミッションとする私たちにとって、関心が高いアートである、ということにすぎません。

「社会性」と「感性」の間で揺れ動くアートには、内容のグラデーションだけでなく、形式にもさまざまなものがあるでしょう。プロテストアートのように社会の在り方に直接的に訴えかけるもの。参

加型アート、ソーシャリーエンゲイジドアートのように、その提供と受容のプロセスを社会に開こうとするもの。あるいは、日常の出来事やまわりの人々との関わりに関する最もパーソナルな出来事をめぐる表現の中に世相のあり様を埋め込むもの。表現形式の革新自体が時代の革新と表裏の関係にあるもの。

創作者と鑑賞者の関係も、パトロネージから市場へ、一方通行のものから双方向な形へ、と変わっていく中で、「市場の先」に何がありうるのかは、私たちの関心の強いところです。現在のアートマーケットや、創作者の置かれた社会環境・市場環境には、たくさんの課題があると私たちは考えています。これらも、私たちが取り組みたいテーマの中に入ってくるでしょう。

私たちは、アートを社会に開きたいし、社会をアートにつなぎたい。それによって、より豊かな世界が必ず訪れると信じています。

私たちは、「もっと社会をかき混ぜることが出来る」と思っています。見えないものを見て、聞こえないものを聞き、言葉にならないものを語り合う習慣を、世の中に広めたい。最適化、効率化が求められがちな世の中で、世界の曖昧さと多義性に向き合いたい、と思っています。

そのために始める「アートプロジェクト」です。長い目でコツコツやっていくつもりです。ぜひみなさんの参加とご支援をお待ちしています。

以上